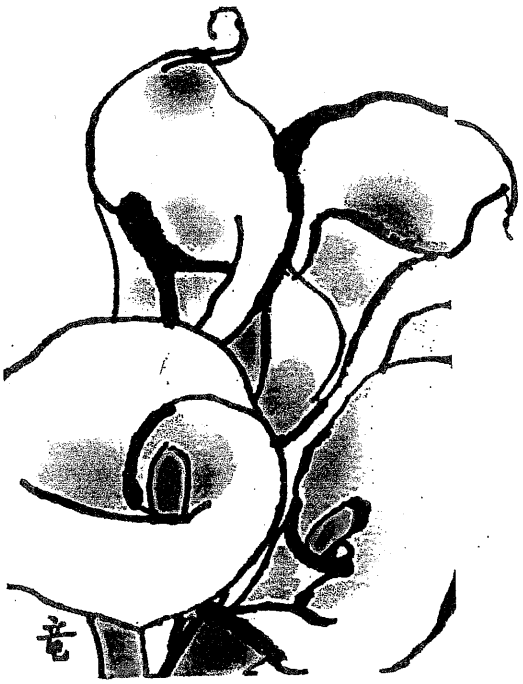
オリーブの樹

شجرة الزيتون

第158最終号
2022年7月13日



獄の最後
どこにいても
同じだと
生きて来たこと
噛み締めながら

カラーの花

目次

P 2 感謝の言葉 重信房子
P 3 春の歌 重信房子
P 4 独居より 重信房子
P12 釈放されて お陰様で満期出所しました！ 重信房子
P14 プレスリリース 再出発にあたって / 質問について 重信房子
P18 戦士たちのリッダ闘争（5） 重信房子
P23 重信房子著書 編集室
P24 今後の活動体制 重信房子

重信房子さんを支える会

皆様ありがとうございます

重信 房子

私は、２０２２年５月２８日朝に東日本成人矯正医療センターを出所し、自由に行動出来る身になりました。様々に、私の救援、支援で永い間支え、励まして下さった皆様、「オリーブの樹」を読んでくださった皆様に感謝と共にお知らせのご挨拶を申し上げます。

５月２８日、皆様の温かいサポートの中、獄から出所致しました。当日の様子は、マスコミ報道に示されておりましたので省略致します。

その後、早稲田で多くの方々に「おかえりなさい」の歓迎の集いを催していただき、驚きつつ大変ありがたく、嬉しい再出発の日となりました。その後体調を崩したために「５・３０集会」には欠席、ボイスメッセージを送ることで交流しました。

まだ体調が十分ではなく、（後に、医者に「十年以上もの永い間病気ベット生活の上に歩く事も運動も制限禁止状態だった人が、朝からマスコミに囲まれたり話したり緊張で気持ちで持っていただけで倒れるのは当たり前と考えればいいんです。ホリープの手術は、体力を回復してから急がずにやりましょう」と言われました。）

当日、出所の記者会見の直ぐ後に、早稲田の歓迎会の限られた時間の中で、一人ひとりが私に声を掛けてくださいました。でも十分なお礼の言葉を交わせなかったことがとても心残りです。

さらに、「オリーブの樹」の編集室、「支える会」から読者の方々にカンパを要請し、それに多くの友人達が呼びかけに応えてくださったとのこと、ありがとうございます。

今後は家族として、長い間待っていてくれたメイと話しながら生活の仕方をゆっくりと考えたいと思っています。まず体力回復、次に手術、その後どんな形でオリーブの樹に代えて交流して行くか考えます。ウェブサイトをメイが開いてくれましたので学習しつつまずそこから、と思っています。

治療兼ねて、６月１日やっと街に出て少し歩きました。それ以来リハビリしつつ生活条件を整えているところです。「オリーブの樹」読者の皆様、長い長い間伴走してくださったこと、励ましてくださったこと本当にありがとうございました。これからは、直接様々な形でお会いしたり交流していけることを願っております。「オリーブの樹」は今号の１５８号で一旦終刊となります。これまで誠にありがとうございました。

最後になりましたが、ずっと「オリーブの樹」の発行に尽力くださった山本万里子さんら友人達に感謝を伝えます。

以上を最終号の挨拶とします。

春の歌

房子

別れるために抱き合うウクライナ国境パレスチナ見ゆる

信重

冬木立戦車が走るチェルノブイリ世界壊れる兆しをみたり

難民の受け入れ拒む足下に外相連れ帰るウクライナの人ら

抵抗するウクライナの民が英雄ならパレスチナの民もテロリストに非ず

ニッポンが核戦争の矢面に立つと知らぬかQUADとアンポ

陽が眩しい解放歓迎の旗揺れて生きて出所の門を出でたり

早稲田で待つ友らの笑顔に迎えられ出所の感慨押し寄せてくる

ベイルートオカモト囲む仲間らのリッダ墓参の画像に見入る

五月尽リッダ闘争五十年目自由のわが身と重なる喜び

独居より　3月8日～5月27日

占領に立ち向かうウクライナの人びとが英雄なら、パレスチナ人も英雄であり、テロリストではない！

重信 房子

3月8日　まだ居室で刑務作業が続いています。居室作業が良いのは、片付けや食後、作業後の掃除がない分、作業所よりダルマ作りに時間が少し多く使えることです。それに、居室で休憩中さっと新聞を読めることです。工場での作業の方が良いのは、みんなで話し合ってダルマの作業を助け合ったり、おしゃべりが出来、暖房が入ることです。ダルマ作りはとても楽しいので皆休日を嫌がります。私も楽しいけど、休日は自分の作業に集中できるので大切です。今日はもう盛りに咲いているチューリップ赤2本、ラッパ水仙の黄2本、スイトピー1本、春が届きました。

今日は女性たちの活動に連帯！3月8日です。

3月10日　朝9時から胃カメラ検査、鼻チューブからやってもらいました。胃にポリープが一つあったのですが、次回検査時、主治医に聴くつもりです。「創」「紙の爆弾」など受け取りました。「創」に「オリーブの樹」から抜粋してまとめた篠田編集長の文が載っていました。Mさんからは「連合赤軍事件の全体像を残す会」の追悼に参加したと、いろいろの写真で説明したものを送って頂きました。曹洞宗「金秀院」で雪野さんが参加して法要が行われた様子がわかります。弘法大師の「阿字の子が阿字のふる里たち出でてまたたち還る阿字のふる里」の一首が碑に刻まれているそうです。阿字とは仏様の世界のことで、殉難者を偲んで当時の住職がお選びになったとMさん。良い報告をありがたく読みました。

3月11日　今日は3・11から11年。もう11年なのにフクシマの原発問題の解決も難航し、汚染水は希釈して海へ……。そして原発施設が戦場となるウクライナ。プーチンの戦争はまったく正当化できないですが、プーチンの警告は一貫していたのに、米・NATOの挑発的なウクライナのNATOへの招請(これは2006年のブカレスト会議のブッシュ息子の時以来)、その後の動きが事態を悪化させました。その割に今度は飛行禁止地域設置を求めるウクライナ側を拒否。煽るだけ煽ってウクライナ市民の犠牲は目に見えていたはず。米政権の「戦略的思惑」で戦争の長期化です。

3月15日　栄養ドリンク テルミール 400kcalの200㎖を毎食2本を飲むのですが、今日は毎食一本がやっと。3食に4本位飲みました。明日の大腸内視鏡検査の準備です。

作業中の午後、教育担当官の面接。出所にむけた昨年中の改善教育後、どのようなことを考えているか。又、出所にむけて具体的に学習したいことの確認など話合いました。ここでは、パソコンを使う教育学習はないので、社会復帰に必要な暮らし方、税制や電子マネーや、生活保護の仕組みや、すぐ活かせそうな情報の載っている本などについて学びたいと話しました。4月に入ったら、それらの学習の機会がありそうです。

人民新聞3/5号の脇浜さんの「NATOでもなくロシアでもないウクライナを!」の論文は共感できるものでした。こういう視点で、日本の大手メディアも報道してほしい。NATO側の組織である「欧州安保協力機構」の「ミンスク休戦監視団」は2/28、休戦協定違反はウクライナ側で、数日間でドネツク州563件、ルガンスク州975件の砲撃を受けたと地図をつけて発表しても、米・日本メディアは報道しないことも記しています。ロシア非難だけでは地域平和安定環境を作れないとして、脇浜さんは論文で①ウクライナ東部の住民を攻撃してきた親ナチ部隊（ウクライナ・アゾフ大隊）の解体と住民の安全保障②米・NATOの東方拡大をやめ、ロシア包囲の兵力、基地、ミサイル撤去③核兵器搭載可能な中距離ミサイルのウクライナ配備を行わないこと、ロシアは軍事行動を停止し撤兵すること①～③の実現を求めています。賛成です。ゼレンスキーが感情論に立っている限り、停戦は困難。NATO側も昔の戦略家ジョージ・ケナンのような人物不在の中、主張をとりさげる戦略的決断が

出来ない。NATOの軍事力行使で戦争解決を行わない以上、即停戦、ロシア軍撤退を、ウクライナ市民第一に政治的妥結にむけた譲歩こそが、米・NATOに問われていると思う。

3月16日　今日は朝から4ℓ近いニフレックス（大腸洗浄液）を飲んで13時には準備完了。大腸内視鏡検査。13時半すぎから14時半まで。がっかりしたことに1.5センチ位のポリープを、肛門から55cm、横行結腸のあたりに見つけました。去年の5月、内視鏡検査を行ったのですが、主治医は、腸のひだの裏側なので見逃していた可能性があるとのこと。私が見ても、ちょっと悪性のポリープの形。主治医は自分の技量では、大きく形も複雑で、内視鏡では摘出出来ないとのことでした。主治医は出所後、専門の病院なら内視鏡で開腹しなくても摘出出来るはずであり、半年一年以内なら大丈夫とのことでした。このポリープは、生体チェックのための採取で傷つけない方がよい、癌が拡散したり、今後の手術に良くないとのことで、そのままにしました。そして、その場所がわかりやすいように目印のクリップを2本打ちこみ、墨汁で印を残しました。今日のポリープの発見が5ミリ前後なら、今回摘る確認を承諾書にも記してあったのですが。

出所後すぐ、胃と大腸ポリープの摘出計画を立てることになってしまいました。でも、今見つかって良かったです。出所してからでは多忙で、きっと検査もなかなか出来なかったでしょう。リハビリ含めて、身体を整える機会としたいと思っています。

Ｉさんからの資料届いて、新聞やTVでは、出ていないウクライナ戦争をめぐる様々な人種差別が欧州中心に露わにあることを知ります。シリアやアフガニスタンなどの難民を追い出して、白人のウクライナ難民を受け入れろといった動きです。イスラエルでもウクライナのユダヤ人のみ受け入れるなどの動きもあるようです。日本も「反ロシア」で、ウクライナ人受け入れが「正義」となり、米国追随著しい。イスラエルのガザ空爆を支持し続けてきたゼレンスキー大統領は、ロシアを戦争犯罪と非難しています。ニュースはウクライナ市民の厳しい悲惨な姿を伝えていて、パレスチナの人々と重なります。

資料の中に毎日新聞の「うたの雫」に歌人加藤英彦さんの「それでも空を仰ぐ」という短歌批評が載った切抜き（157号に掲載）がありました。

独房に幻のごと流星雨降る夜なれば生きてと祈る

（「ジャスミンを銃口に」の私の一首）そしてある短歌誌に、"辻褄の合わない囚徒の人生を質すことなく静かに聴きぬ"を引用しながら、辻褄など合わない、どこまで真剣に生きたかが大事。新しい秩序を創ろうとすれば現実の秩序との衝突は避けられず、敗れた時人は現実の秩序によって裁かれる。社会の不完全に目をつぶって生きる私たちに、そのどちらに正しさを見るかは難しい。問われるべき過去と向きあい、それでも熱く変革を願う精神に私はある凛冽さすら感じる。」などです。この歌人の特集が「月光66号」に載っていたのを思い出しつつ読みました。

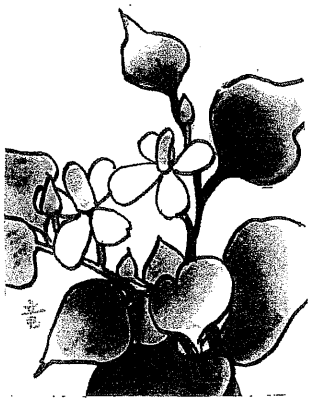
3月24日　獄窓からほんの少し見える昭和記念公園の西端のところ、桜の花が白く咲きはじめたのが見えます。遠いですけど森の一本の木、光を浴びているように輝いています。今月号フォーリンアフェアーズでは、まだロシアが侵略する前のロシアの動きの予想のシミュレーションと対策を何人もが論じています。すでに「かつてない制裁」の発動のリストもあり、今ではそのシミュレーション通りに進んでいます。「シナリオ1」では、強制外交でロシアがドンバスなど分離独立し、軍事エスカレーション回避。この場合米・ＮＡＴＯは東欧にＮＡＴＯ増派。「シナリオ2」では、ロシア空軍力を用いた限定的空爆作戦でドンバス地方拡大し、マリウポリ、ハルキウ占領してロシアと陸で結び、さらにオデッサ攻略して、すでにロシア部隊の駐留しているモルドバの分離独立地域のトランスニストリアまで兵を進める。それでもロシア側も相当の犠牲を出し、ウクライナを弱体化めざしても破綻国家には出来ない。「シナリオ3」では、もっとも可能性高いのは陸海空ロシア戦力の全面投入を予想し、すでにロシア侵攻前から、1月12日には米上院外交委員長のロバート・メネンデス（民主党ニュージャージー）「2022年ウクライナ主権擁護法案」が提案され、現在の制裁ＳＷＩＦＴからの排除含めて出されていたようです。ほぼすべての制裁がすでに予定されていたわけです。ロシア側プーチンが闘わざるを得ないと考える穴に追い込んだ格好です。ロシア国民、ウクライナ国民の犠牲の上にプーチンはドンバスの領土

を拡大する陸橋を確保するまでは止めないでしょう。結局プーチンは、彼の意に反して、ゼレンスキーを「英雄」にしています。20%から30%台の支持率だったゼレンスキー、今では90%以上とか。

戦後秩序の崩壊はグローバル市場化の競争と歪みの中で、世界を中・ロ中心の世界と米欧中心の世界に分裂させ、第三世界を貧困化に益々追いやっています。「正義」や「民主主義」の「聖域」のような強硬策を唱えるバイデンやゼレンスキーはガザ空爆支持者たち。ダブルスタンダードが世界を荒廃させながら。ヤヌコービィッチを政権から引きずりおろしたネオコンのヌーランドは今バイデン政権の政策担当国務次官に返り咲いて、打倒プーチン「ロシア民主化」の夢に突き進んでいるでしょう。

3月30日 今日は「土地の日」。檜森さんの20年目の命日です。今度の出版計画の原稿には檜森さんのこといろいろ書きました。みんなを思い出しつつ黙祷。中東調査会「中東研究」で「ナクバの日」が5月14日になっています。中東専門誌の初歩的過ちか？ 私たちはＰＦＬＰで5月15日としていたので、ウィキペディアで急ぎ確認したい。

3月31日 今日ベランダへ久しぶりに運動に出ました。プラスチック塀のすきまから、遠くの満開の桜が見え、足下に一ひらの花びら!「花見だねー!」と、盛り上がりました。Ｉさんのお便りでも川原や畦道は、ホトケノザ、ハコベ、オオイヌノフグリ、シロツメ草が覆っているとのこと、いいなあ……。水谷さんからとても詳細に資料、データを駆使した論文「プーチン体制によるウクライナ侵略戦争の階級的性格と日本労働者人民の課題を考える」が届きました。学習するのに読み易く歴史もまとまっていてわかりやすいです。原さんの「ザ・レッドスター」で「STOP!プーチンの侵略戦争」もうけとりました。反戦闘争が世界で広がれば広がる程、他の地域の理不尽な状況におかれているミャンマー、パレスチナ、アフガンも同じように人民、市民の間に反戦連帯が広がってほしい。避難民を選別する人種主義を広げないためにも。人々の心からの反戦の願いは、米国バイデンやNATOの反ロシア利権に収奪されないようにと願っています。もう弥生も終わる三月尽。



4月11日 今日から工場での作業となりました。また、午前中には社会復帰に向けての「支援指導プログラム」が始まりました。今日のオリエンテーションによると、第二回は福祉相談窓口での必要な知識など、第三回は電子マネー決済、第四回は外部講師による講義、第五回は看護師による健康管理のあり方など、第六回が全般的に学習をふまえて。以上のようなプログラムは刑期が10年など長期受刑の人に、変化した社会に適合してもらうためのものだそうです。今日は「受講者用ワークブック」図解入りの教科書と厚労省の「コロナ」による「新生活様式」、消費者動向、消費者庁の動向など、コロナでの社会生活の変化や発生しているトラブル対処や、ネット記事など本1冊位の資料受け取りました。ひととおり読むのはいい社会学習資料です。今日はプログラムの目的や学ぶことなど、説明うけ読むべきものも受け取りました。午後には分類課福祉関係担当者の人と面接。出所後すぐ病院はどうするのか？ 健康保険は？ 身体の健康管理は？ 財政・生活費は？ など質問を受け、対処すべきことなどの話をしました。夕方には居室に戻って「就労支援かわら版」3月号はじめて見ました。ここから出た後の就労などの回覧です。

やっと「オリーブの樹」が届きました。3/31に送ってくれているようですが、何故か今日までかかりました。表紙の一首に似合う椿をありがとう！ 連載の「戦士たちのリッダ闘争」は、原文の中間を抜いて、今号では「7.決断」を掲載しています。その連載の終わりに「5月に幻冬舎から出版予定です」とあります。タイトルは「戦士たちの記録―パレスチナに生きる」です。今朝バタバタしながら、その出版予定の初校を幻冬舎に返送したところです。17Ｐの「うたの雫」はうれしい

コメント評でした。「七転八倒百姓記」には他の山羊農園などに役立つことが記されていると思います。

もうあと１回になった最終号の「オリーブの樹」は６月発行予定です。出所直後の様子なども加えて発行します。「オリーブの樹」ずいぶん長い間月刊、その後の受刑者処遇後は２カ月に一回、そして季刊へ。友人たち、編集部、支える会の支援のおかげで、ずっと出所まで記録できそうです。その後は体調、リハビリ、社会的条件などふまえつつ、どんな形で発信していくか決めようと思っています。

４月１８日　Ａさんから久しぶりのお便り。3/27の泉水さん追悼の様子の写真を送って下さったとのことです。3・30には檜森さん追悼20周年目の会もあったとのこと。友を偲びつつ友が再会し合う命日は大切な時間です。写真はまだ未入手です。四月の題詠は「坂」“女坂行きつ戻りつ論じ合う愛の替わりに経哲草稿”大学時代愛を語る照れくささに、いろいろと難しく語り合いつつ、好意を寄せあったものでした。経哲草稿はマルクスの愛についても述べられていて、そんな若さを思い出します。“ふきのとうつくし咲き初(そ)む土手めがけ幼と駆ける緑の坂道”来年は私もそんな時間が持てると良いのですが……。

４月２２日　快晴。昨日は曇り空だったけれど久しぶりにベランダへ。ポピーのオレンジの花がひとつ今年も咲いているのをみつけてみんなで歓声! 出所後の専門病院への診療情報提供書（紹介状）にCDを添付要請した方が良いと、主治医と分類課が話合って、願箋を書くよう言われて書き込みました。出所時に、これでモニター画面（大腸内視鏡の）見ることができるＣＤも受け取れることになりました。

メイも帰国出来て、私の出所に向けた準備に入っているようです。整理すべきあれこれは、まだ手つかずで、連休中に予定していた本や書類などの整理をすることに変更。あと、もう一回のゲラのチェツクが「戦士たちの記録」と「歌集 暁の星」も、五月にずれこんでいて、そのあと、書類や資料整理に更にずれこみそう……。

４月２５日　今日は快晴。工場から戻り、すぐ入浴して真赤な顔で髪もびしょびしょ。暑い暑いと着換え中、面会の知らせ。大谷弁護士とメイが一緒に来てくれました。あわてて面会室へ。大きな点は二つ。ひとつは、ゲラ最終段階の文章の加筆や削除点の話。もうひとつは、当日のプレスリリースやマスコミ対応のプランなど、その他、あれこれ短い時間にワイワイと話合いました。５月30日は50周年短くても参加するつもりです。

戻って、分類課から、「出所時は、敷地内（と言ってもパーキングエリア）に３人。車一台可能。当センターから出所日の知らせを誰に送るべきか?」と聞かれました。当センター側から身元受取人に対する手紙が送られ、そこには迎えに来る出迎え人３人の名前を書いて、当センターへ送り返すよう記されているとのことです。

夕方、由井さんよりお便り。由井さんの、前に出版した本が、新しく判型四六判、タイトルは「重信房子のいた時代 増補版」と決まり、５月13日に発売とのことです。由井さんからは「もうすぐ目と目を合わせて語れますね、周囲の同世代の人たち、転倒・怪我の報告がいくつも…。気をつけましょう。近いうちの再会を」と。楽しみです。

忠紀さんハッピーバースデー!もう4/3は過ぎましたが、遅ればせに祝！ 娘たちと共に、巻寿司をつくってパーティー!唐揚げも。アップルパイはすぎなちゃん作の写真と共に送ってくれました。「この年になって、なぜこれほど自身で若く感じておれるのか、自分でも不思議です。」と、本当に若々しい忠紀さん。28日は橿原市の沖縄「返還50周年」の集いで三線で沖縄民謡をうたい、29日は大阪ウツボ公園で恒例の原発やめろ集会。川口真由美さんら出演。「この日に向けて新曲の原発止めさせようの歌を今作っています。」「30日・東京の房子さん出所を祝い迎える集会に参加します」と、あります。

４月３０日　“四月尽昭和公園黄緑萌え
五月出所の訪れ近し”

５月２日　連休の中の平日の月曜、校正点を今朝速達で送りました。おしつまって校正まだやっています。午後大谷弁護士の面会。「ハーグ事件無罪をしっかり書き込むべき」など助言を受け取りました。また、当日のプレスリリースの文・方法・

記者対応など大まかに話し合いました。5・30 の集会には参加する予定です。

5月5日　憲法記念日の世論調査はウクライナ問題の影響が出ているようです。政府の煽動で今後更に「改憲」へと向かうのが危惧されます。ゴルバチョフ元書記長と現ロシア共産党の見解を知りたいのですが、新聞・TVでは見当たりません。私は戦略性を欠いたゼレンスキーの「徹底抗戦論」には反対で、気がかりです。ウクライナとウクライナ人の本当の安定のためには、即停戦に向けた非同盟路線こそ必要と思うからです。

5月12日　今日歌集の校正を送りました。ふと一息つく時間がとれて、何だかやっと出所準備にとりかかれそうです。デジカメ歌人から立夏のお便り。小手毬の花、大好きな花です。"水ぐるま近きひびきに少しゆれ少しゆれゐる小手毬の花"（木下利玄）なんともいい一首が添えられたまあるい花です。「あとわずかです。お身体を大切に！」と、ありがたいことです。三首が添えられていますがこれを選びました。"田起こされドローンが肥料撒き用水路が田ごと水張り代掻き始む"五月の風景が浮かびます。肥料を撒くのがドローンなんですね、今は。

5月13日　今日は最後の矯正指導日。ここでは、矯正指導とは月2回「一般改善指導」として行われます。9時30分からの朝の教育用放送（「過ちは再び」と職業についた人の話など）を聞き感想を書くこと。午後は録画TV（「クローズアップ現代」「情熱大陸」「プロフェッショナル」など）の視聴と感想文を書くことです。

それと前回の指導日から今日までの反省、進展状況、抱負などを9つの目標にそって総括文を提出する日です。9つの目標の3つは当局の指示（①（病院なので）体調・治療をしっかり規則に則って管理しているか②反省を日々の規律にどう生かして規律正しくやっているか③被害者に対する謝罪反省）

他の3つは本人の自己改善目標です。（私は①中東研究を深め出所後活かせるように学習する②短歌の学習によって更に表現・技術など高める③出所に向けた学習）

更に当面の生活目標3つ。（これは前回の指導日に「当面の目標」として決めたものを達成できたか反省点など記し、次の指導日までの目標を3つまた記しておく）私は①ゲラ校正作業を終える②出所に向けた整理③出所後にむけた学習の3点合計9目標、その他に刑務作業、改善教育、出所前知識や社会の仕組み学習など結構忙しい。

それと別に本来の自分の学習、手紙や日記、原稿校正など時間をムダにしないように食事も急いで時間を有効に使います。起床7:30 前、空が明るくなれば許されているので読書。ここで書籍・雑誌（資料や新聞などはなぜか不可）が5時ごろから読めます。

今日はもう出所まで2週間しかないので、これからの予定をたてようと思います。来週から居室ではなく工場作業とのことで、その来週からの一週間で作業仲間たちに誰でも出来易い糊付けの仕方、おもり付のコツ、粘土でどう丸くうまく作るか、ペンキ塗りのコツなどを伝え終える予定です。上手下手のバラつきは他人の話をよく聞いて、自分のやり方を改めることが出来るか？常に次の工程の人の苦労を慮って自分の作業をやっているか否かで違うのだと強調して話しています。みな熱心で良いものを作ろうとするし、作業は面白いし、チームは気持ち良く働いています。

I さんからの手紙と資料夕方受け取りました。それによると、ロシア共産党の現在の政策は2/15に「ドネツク人民共和国」と「ルガンスク人民共和国」の承認を求める決議案を提出していて、下院で可決されたイニシアチブをとっていたのを知りました。（党の議員のうち3人が党方針に反しウクライナ侵攻批判）2/26 のゴルバチョフ財団の声明では、敵対行為の早期停止と和平交渉の即時開始の必要性を確認する交渉と対話の訴えのようです。「フォーリンアフェアーズ」のロバート・ケーガンの論文を読むと、ロシアの指導者プーチンを地位から追放するまで軍事支援と制裁を米政府は決めているようです。バイデン政権は強硬策を同盟国に押し付けつつ、同時にそれを米国の盟主化、資本主義諸国への同盟化、ヘゲモニー回復に使っています。日本が完全にそれにそって行動しているように。「ウクライナ問題」で、米国は派兵せず、ロシアの崩壊を企み、多極化している世界を米国の下に統合する米国政府にとっては、都合が良いうえに更に軍需産業もぼろ儲けする米国です。副

作用は大企業に利益、庶民にインフレ・物価高・困窮化で必ずどこかで破綻し、米国内でも民主党より共和党トランプ潮流が中間選挙でも勝ちそうとか……。

5月15日　沖縄返還から 50 年目。沖縄の基地は無くなるどころかアジアの対中国・北朝鮮・ロシアの最前線の役割を負わされている 50 年目です。これは核戦争の前線でもあります。第二次大戦後「琉球処分」の再来のようにヒロヒトが米軍に差し出した沖縄は復帰後も住民の意思をないがしろにして今日まで来てしまいました。日本が「戦争国家」化の道を進む程、沖縄は本土の犠牲を強いられます。沖縄に連帯する地域社会をいくつも本土の中に作り、下から横へと連帯することを夢想しつつ50年目の厳しい記念日を迎えています。

5月16日　歌集「暁の星」の再校ゲラが届き、福島泰樹先生の「跋文」が収録されていて初めて読みました。圧倒される量と内容です。「ジャスミンを銃口に」以来の 12 年に及ぶ 5600 首とそれ以降の2018年9月から今年の5月の歌まですべて読み込み「ジャスミンを銃口に」から論じていて、その大変な仕事量と深い洞察に満ちた論評はこの歌集の幹のようにそれぞれの歌を引き立てて下さっています。139Ｐ～186Ｐまで私の歌を様々な角度から縦横によいところを探して論じて下さっています。これらの文章を読むために、この歌集を読みたいと購入する人が（私の歌より）かえって多いかも……と思ってしまいます。過分な論を福島師の身を削って記して下さったことに、感謝ばかりです。この文で歌集が生きた感じです。私やＪＲＡの、とくにリッダ戦士たちの来歴も詳しく記されています。加えて「栞」として足立正生さん四方田犬彦さんらの文も収録されているそうです。（それは未見）

5月19日　昨日から昭島も快晴になりましたが、コロナが広がったのか、工場もベランダ運動も今週も禁止で室内作業が続いています。昨日「歌集の栞」の文章交付されました。足立さん、四方田さん、田中さん３人の方が、歌集を読んで暖かい文を寄せて下さっています。ありがたいです。「跋文」と栞で歌集が素晴らしいものに変身した感じです。デジカメ歌人から立夏の、そして獄への最

後のお便り。鉄線（クレマチス）の花と共に。「本当に長い間おつきあい頂き感謝しております。」と、ありますが、こちらこそその言葉を伝えたいです。クレマチスは、きれいな花の種類もたくさんあって父も好きだった花です。獄で、デジカメ歌人からの花の写真、知識にいつも楽しませて頂き豊かな気持ちをもちました。感謝でいっぱいです。今日も獄窓からは太陽さんさん。

今日は No.612 を送りました。人民新聞にユダヤ人学者イラン・パペの発言が載っていて、中東のパレスチナの人々の意見と共通しています。「ウクライナ政府は、ネオナチ武装集団とつながりがあるばかりか、露骨なイスラエル派。ゼレンスキーは、パレスチナ人の権利行使に関する国連委員会からウクライナ代表をひきあげさせた」とのこと。その上、ゼレンスキーは 2021 年のイスラエルによるガザ攻撃のあと「ガザ問題の唯一の悲劇の主人公は、パレスチナ人のテロに苦しんでいるイスラエル国民だ」とインタビューで答えている、とパペは述べています。中東の「ダブルスタンダード」は、ウクライナ問題から世界に広がり、今後それがあたりまえの基準とされそうな現バイデン政権の動き。占領にたちむかうウクライナの人々が英雄なら、パレスチナ人も又英雄であり、テロリストではない！「ウクライナ」について新著にも「追記」しました。

5月20日　今日は、刑務作業最終の日。ダルマ作りの一番始めの工程の材料 25 個に糊づけして磨き、ダルマの型を整えておもりをつける作業。一方で 12 個粘土つけて検査に出すまでの作業を最後と思ってていねいにやりました。そして今日

は二時半から一時間コーラスの時間です。今年満90才になる先生は、もう歌わないと、数年歌っておられなかったのですが、私の出所を知っておられるので、「今日は歌います」と、素晴らしいソプラノで「ライムライト」を独唱して下さいました。そして今日の名曲演奏は、ショパンの「別れの歌」。先生は、70代になって夫を亡くされ、刑務所施設でのボランティアの歌唱指導を始めて生き甲斐となり、あなたたちから学んで、どれだけ幸せな時期をすごしていることでしょう、としんみり語って下さいました。今日の歌は「あなたが好き」「今日の日はさようなら」「故郷」「花は咲く」これまででも最高のコーラスの日でした。先生に感謝を一言お伝えし、逆にお礼と励ましを頂いてしまいました。

5月23日 出発準備の週です。宅送手続き、郵便宅下げ（書類など）など忙しい。午前中に、出所前教育（釈放前指導と言う）の、オリエンテーションをまず受けました。「釈放前指導とは、出所後の生活に必要となる知識を学ぶための指導です。」とあり、必要な学習資料（「道標（みちしるべ）」テキスト一冊、出所時所持可の「道標ハンドブック」一冊、ハローワークガイド一冊、「新しい生活様式」の実践例のチラシ一枚、保護観察所所在地一覧一枚）と「意識調査アンケート」、「自由発言用紙」（所内生活を通じて感じたことの自由記載）が交付されました。

次に、法的な説明者がみえて「道標」の内容を解説。そして「在所証明書」が、社会に出て、必要になる事例について示して下さいました。明日は、在所証明書の発行の願箋を申請します。

夕方、Kさんから、ブラックベリーのうすいピンクの花。垣に沿って咲いていて野バラの蕾も。「忙しい毎日ですね。無理なさらないでゆっくり休んで穏かに過ごされるよう祈ります。無理は禁物!何でも対応してしまいそうなので陰ながら心配してしまいます。御自愛下さい。」とあります。そうです…。どうしても対応しないと…と思ってしまう私。欠点をよく見ておられます。「今日から刑務作業なしなので、テレビ視聴もなしです」とのこと。私はニュースしか見ないので、良いですが、出所する人が出る前にテレビ見れる方が有為だと思います。

“あたりまえのようにバイデン横田基地へ
　　米州のひとつに降り立つ如し”
“ニツポンが核戦争の矢面に
　　立つこと知らぬかQUADと安保”

5月24日 「歌集 暁の星」一冊届きました。ボリューム感もあって、考えていたより、すばらしい装丁です。栞3人の文、福島先生の跋文で、この歌集が実力以上に輝いてみえます。ありがとうございます。又、共同の鈴木さんから、この歌集について書いた記事が送られて来ました。それも、よいものです。みんなの支えの中で歌集が出来上がったことを実感しています。

5月25日 今日は出所に向けた最終調整のため3時ころ、大谷弁護士とメイとの面会。まずは準備したいくつもの服や靴、カバンの中から、大谷弁がモデルになって着てくれてた「スルメイカ風」ときめました。メイの友人たちが選んでくれたという帽子も。ワクワク気分。それからおちついて当日の出迎えやプレスリリースのこと話し合いました。8時半ころ出所と聞いていたのですが、当局側から7時半に迎えは来るようにとのことで、帰りに2人に確かめてもらいます。外の景色も私が出所荷物の台車を押して進むという方向も内側にいた私には、わかりません。それでも大谷弁護士とメイたちのタッグにすべて委ね、当日は指示に従ってまず行動することにしました。出所準備の大変な様々を楽しそうに引きうけてくれていて、ありがたいことです。幻冬舎の新著「戦士たちの記録―パレスチナに生きる」は届いたのですが、検査に入ってしまいました……。どうなるか。浅川さん90才の歌人、門前で私を出迎えたかったが、体調整わず断念とメイに連絡があったとのこと。ムリせず体調整えお会いできるのを楽しみにします。まゆみさんからは、もうすぐの出所に長い間おつかれさまでしたとのねぎらいのお便り感謝です。大谷弁から歌集は評判が良いと聞きホっとしてます。幻冬舎の本は、27日発売（歌集も）。

2010年8月に受刑処遇に入って、独居日誌№1を書きはじめ、この№613で最終となりました。でも出所後の様子は、オリーブの樹158号発行もあって、5月31日までは続ける予定です。この日誌の中で、友人たちとの交流、励まされたこと、反省したこと、短歌、時事と、いろんな自分の想

いを記しながら時を重ねました。ふりかえると、本当に温かなみんなに囲まれ、支えられてきた獄中生活でした。心から感謝を伝えたいです。外界に出れば、非難や冷笑、妨害、尾行、まわりへのいやがらせなど再び味わうかもしれません。それらは覚悟しつつ、友人たちに迷惑や被害がいかないようにと願わずにはいられません。どの友人も「ゆっくり」「穏やかに」とこれからのことをアドバイスしてくれています。まず出所し、そしてポリープの摘出をして、学びながら社会に慣れたいと思います。この獄からの最後の通信にみんなへの友情に感謝しつつ筆をおきます。

5月26日 今朝9時過ぎから「領置品調べ」でした。全ての私物を残さず台車に乗せて一階の部屋でしらべるのです。昨日弁護士やメイのが面会後差し入れてくれた衣類含めて調べられて、その後最低必要なノート、日用品、衣類などのみ再びもちかえります。広辞苑などは、既に宅送したので一時間位で終了。

戻って十時過ぎから最後の主治医の診察を受けました。主治医は、十二年前からの当初のシスプラチン、ゼロックス療法等の抗がん剤も効果無く、血流に癌があったので正直生きてここまでこれるとは思わなかったと感慨深げにおっしゃっていました。なんといっても２０１２年の、外部病院によるPET検査で、癌のあるらしい位置がわかり小腸の外側に出来ていた丸い癌を摘出して腫瘍マーカーが下がった事を語り合いその英断に感謝しました。「出所後のポリープ摘出も大丈夫でしょう」と励ましてくださいました。その後入浴。午後は検査中と言われていた新著「戦士たちの記録　パレスチナに生きる」の交付を待ちましたがダメでした。

夕方、上原さんからのお便りに高原さんからの伝言で「6月１８日にあさま山荘から五十年シンポジウムがあるので重信に参加しないよう伝えて欲しい。また、その集会にメッセージも送らないで欲しい」とありました。高原さんの他人の言論を封じようとする姿勢になんという人か、と思ってしまいます。遠山さんのことがあるのは分かりますか私には私の考えがあるということ、自由があるということを考えて欲しいと思いました。勿論参加しよう等と考えているわけではありません。そんな体調ではありませんから。出所したらこういう押し付けも多いのかと考えさせられます。私が参加したほうが良いと思うことは、私が決めます。当面体調不良で、当日のプレスリリースと記者対応、友人の歓迎の会、その後の旧友たちの土曜会主催の歓迎には、無理してでも参加したいですけれど。

夕方、警備担当責任者から話があると呼ばれました。「当日は、通常の駐車場を閉鎖し、迎えの車は、大谷弁護士、娘さんのメイさん、運転する人の人三人のみ建物の棟の入り口に乗り付けてもらうつもりで、あなたにはほとんど歩かずにこの敷地の外に出て行って欲しい。記者が多く来るし、大谷弁護士と娘さんの面会時の話では、あなたが歩いてみんなに挨拶しつつ車に乗り込むというのが分かり、我々の考えている警備と、かけ離れているのでそこを理解してもらいたい」とのことでした。「あら、私たちの面会の話を聞いていたのですね？！ それならその時言ってくれれば良かったのに……。もう大谷弁護士たちに知らせられないですし、計画もあってその変更は出来ませんよ」と言いました。

当局側警備としては、とにかく騒ぎになりたくないとの事で、もし大谷弁護士らが車での建物棟への乗り付けを拒んだりした場合あなたから話して欲しいなどといっていました。それで「出所７時半」というのも通常の８時半を特別変更したということも分かりました。

5月27日 今日午前中待っていた検査中の幻冬舎の新著「戦士たちの記録―パレスチナに生きる」が交付されました。印刷ぎりぎりまで校正していたものですが、校正点を見つけました。

１点目は１３頁の３行目国連人権委員会ではなく、国連人権理事会、２点目は、３５７頁6行目政略的合意は、戦略的合意です。３点目は、３３０頁６行目～パリについて拘束されたＴ教授や他十数人の～「Ｔ教授や他」が抜けていました。

校正チェックをしながら最後の獄の夜。官物、私物、廃棄物、持ち出す物をより分けながら最後の夜を閉め括っています。今朝の朝日新聞に幻冬舎の広告が載っていて「戦士たちの記録」の他「革命の季節」「ジャスミンを銃口に」「りんごの木の下であなたを産もうと決めた」の３冊の緊急重版したと載っています。重版して売れなかったら気の毒と思いつつ広告を見ています。

★釈放されて★

ありがとうございました　お陰様で満期出所しました！

重信 房子

５月２８日　よく寝ました。６時半起床の三十分前に目覚め既に準備を終えていたのでベッドで時間を潰しながら起床の合図で急ぎ洗顔。十五分くらいで数人の処遇担当の人たちが見えノートは再点検のために渡し１階へ移動。そこで食事。いつもと異なるメニューの魚肉ソーセージを齧った程度しか食べられませんでした。そして荷物を詰めて着替えを終えました。誘導されて歩き扉を開けるとそこは外と繋がっていて迎えの車がそこに止まっていました。大谷弁護士は私が歩いて車に乗り込むなど企画した計画が狂ったと当局のやり方に批判はありつつも、とにかく再会を喜びあいながら手短に話し合いました。海外からの友人たちやさわさわの友人たちが門前で歓迎して待っていること、記者達が大勢待ち構えていること。私には外の状況が分からないのでとにかく指示に従うからと確認して出発。海外の友人たちの横断幕とさわさわ旗がまず目に入り、驚きうれしい気持ちが込み上げましたが、多くの記者たちで騒然。大谷弁護士と記者が確認した通りの動きができないために写真を撮ろうと押し寄せたようです。私は当センターの敷地をこえたところで車を降り「おはようございます」「ありがとうございます」を繰り返してまた車に乗って近くに公園で記者たちが待っているとのことで移動しました。

音楽を鳴らしてワーワー演説して騒いでいる集団が居て私は権力に抗議でもしている集団かな、位にしか考えなかったのですが（２０００年の逮捕後、警視庁に民族派の人が、毎日街宣車で私を応援して毎月１万円ずつカンパしてくれて、警察も苦い顔をいていた事があったので）後に聞けば今日のは、私を糾弾する右翼だったとのことで笑ってしまいました。

とにかく記者会見場の公園に着いて多くの取材陣が居る事に驚きましたが、再出発のけじめとして一言表明しておきたいとプレスリリース（「再出発にあったって」と、そのほかにこれまで記者から受けてきた質問のいくつかに答える意味で「質問について」という文章）を記者らに配布し、お詫びと感謝といくつかの質問に答えました。（本誌１４頁～１７頁に掲載）

歩くこと禁止の永い入院患者だったので気力で持ち応えていたところもありました。その後、早稲田での歓迎の集いにいく道々、車に酔って何度も吐いてしまいました。でも吐いたので元気になって、会場満員の沢山の友人達に迎えられ、とっても元気になりました。

温かい友人たち。足立さんの司会で短く挨拶し、乾杯の後一人ひとりが自己紹介をしてくれて、また私の席に次々に来て話してくれました。旧友、メイの友人、新しく出会った友人達みな心から私の自由を祝してくださって感謝と感激の時間で高揚してしまいました。１２時半「もう解散」の声が発せられて名残惜しい別れ。でもこれからはいつでも会える！　という思いを噛み締めながら会場を後にしました。

５月２９日　前日のエネルギーの放出のせいか、体調不良。体に力が入らない。今日は、両親の墓参りに行く予定でしたが中止して休む事にしました。全ての予定を中止して体力回復に努めましたが思わしくありません。とにかく住居の確定、歯科治療、ワクチン、ポリープの手術と色々しなければならないのにメイも付添って支えてくれて彼女自身の仕事に動き回れません。

夜、ライラ・ハリドからメイの電話に祝福の電話が掛かってきて話をしました。私の解放にPFLPも声明を発表して社会への帰還を祝しているとのこと、嬉しく聞きました。またイタリアで友人経由アントニオ・ネグリも私の永い獄中の戦いを称え連帯の言葉を表明しているとのこと。階級闘争は絶たれず、より良い世界は可能だと。

今日のエルサレムでの戦いは厳しい様子をアルジャジーラの英語ニュースで伝えています。

５月３０日　５・３０の五十周年集会に参加したかったのですが、朝から体が動かず立ち上がれません。一昨日にエネルギーを使い果たしてしまっ

たようで、まだ回復していません。みな待ってくれているのに……。

でも足立さんに電話して今日は無理そうなので迷惑をかけないためにも欠席し、ボイスメッセージを送ることで了解してもらいました。

ボイスメッセージ作成後、メイの友人たちの手配で結局病院に行きました。医者は、「20年以上も自由に歩くことや運動を禁止された世界から出て記者会見や友人との交流で体力を使い果たしているのでしょう。まず点滴し、休養第一でワクチンもポリープ手術も体調を回復してからにしましょう」とおっしゃってすぐ点滴を夜までかかって打ってくれました。

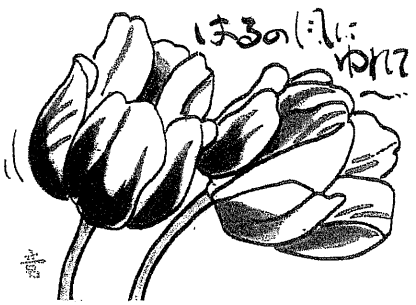
折角５・３０集会に来られた友人たちには申し訳なかったと思います。集会には１００名を越す方々が参加されたとの事です。何とか体調を整えたい。夜９時からのNHKニュースで私に関しての特集を組んで居るのを見ました。驚いたのはそこで画面にNHKが入手したとして獄中日誌のNO.613が出ていたことです。（NO.612だったかも知れません）

５月３１日　昨日点滴したおかげで立っていても大丈夫になりました。でも無理せず今日も休むことにしました。友人達からも祝したメッセージが様々届きます。昨日の集会で会えるのを楽しみに参加してくださった方も多かったと足立さんも伝えてくれました。体力の無いのを実感しています。夜、途中からNHKニュースを見たのですが、岡本公三さんがPFLPら解放闘争の仲間たちとともに５．３０リッタ闘争に連帯し記念追悼して、バーシム、サラーハ、ユセフ、ニザールの墓に参っていました。公三さんは、車椅子でしたが元気で健康そうに見えました。とてもありがたく嬉しいことです。ライラからも知らせてくれました。パレスチナの友人たち、バッサム・アブシャリーフなど色々な昔の知り合いも「マブルーク！」（おめでとうのアラビア語）とメッセージを送ってくれます。

今日はまた、大谷弁護士経由隆介さんから６月４日の土曜会の私の歓迎集会について出席できそうか、もし不可ならメイちゃんだけでも参加して欲しいと連絡が入りました。私は土曜会には是非なんとしてでも出席しなければ。逮捕直後から精神的物質的に支えてくれた大学時代の友人たちです。会いたい友人たち、手紙で出版の本をやりとりしてきた岡村さん、毎月法要面会に来てくださった永田和尚、懐かしい明大ブント時代の仲間たち。直接会えるなんて何とありがたい事でしょう。短くても是非参加してお詫びやお礼を言いたいので参加します、と伝えました。まだ時間があるので体調を整えたい。

６月５日に名古屋で泉水さん追悼の会がもたれるのでメッセージを送って欲しいという連絡が届きました。体調が良ければ政治的責任の意味でも参加しなければと獄中で追悼会の予定を聞いた時には考えていましたが、今はまだ電車に乗ったり街に出ることも出来ていないので叶いません。習い始めたスマホのメールでほんの一言のメッセージを書いたのですが二時間もかかってしまいました。「ボイスメッセージにすれば良かったのに……」とメイに言われました。何もかも一つ一つ学習なので体調は悪いけど興味深々で過ごしています。

６月１日　初の外出。点滴をしてもらった時はタクシーで往復したので今日始めて街を歩き、メトロに乗って外出です。メイが前から歯医者を予約してくれていたので、少し体調を整えたいと、出かけました。疲れましたが良い時間を過ごしました。メイと少し街を散歩して初めてレストランで食事をしました。昔と違って街は画一的にきれいになり、歩く人々の服装も昔で言えば「カジュアル」です。当時は会社勤めの人は、背広上下でしたから。休み休み帰りました。まだ少しずつ巷に慣れていく必要があります。やっと外出の一歩を踏み出した。まだ体力は無い状態ですが、何とか生きていけそうです。メイの手厚いサポートに助けられていますから。みんなありがとうございます。



プレスリリース(5月28日配布)

再出発にあたって

私は、本日5月28日、懲役20年の刑期を終了致しました。これから社会へ戻り再出発致します。これまでに、いくつかの取材要請を頂いておりますので、簡単ではありますが、ここに一言御挨拶申し上げます。

新しく社会に参加するにあたって、まず、私の逮捕によって被害を受け、御迷惑をおかけした方々に謝罪致します。また、すでに半世紀にもなろうとする過去のこととは言え、私や、日本赤軍の闘いの中で政治・軍事的に直接関係の無い方々に、心ならずも被害や御迷惑をおかけしたこと、すでに述べて来ましたが、ここに改めて謝罪します。

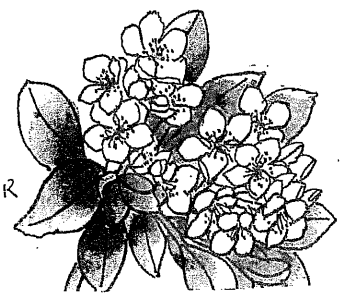
革命の「正義」や「大義」のためなら、どんな戦術をとってもかまわない、そんな思いで70年代闘い続けました。

こうした自分たちを第一としている闘い方に無自覚でもあり、無辜の方々にまで、被害を強いたことがありました。すでに軍事と国際主義を特性として闘ってきた日本赤軍は、2001年に解散しております。

かつてのあり方を反省し、かつ、日本をよりよく変えたいという願いと共に謝罪の思いを、私自身の今日の再出発に据えていく所存です。

またこの再出発の機会に、謝罪と共に感謝も伝えたいと思います。

この長い獄中生活の間、変わらぬ暖かい友情と連帯で裁判の証人としても支えて下さったパレスチナ、海外、日本の友人たちに感謝と連帯の挨拶を伝えます。



そして逮捕以来、公判から現在に至るまで獄中の私を励まし共に歩んで下さった大谷恭子先生をはじめとする弁護士の方々、救援活動に携わり支えて下さった方々に深く感謝申し上げます。

更に獄中で癌に罹患した私の治療に携わって下さった方々、4回の開腹手術で9つの癌を摘出し、命を助けて下さった大阪医療刑務所、八王子医療刑務所、東日本成人矯正医療センターの主治医ら医師・看護師・刑務官らスタッフの皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

私は、1971年2月28日、25才の時に日本を発ち、30年近く海外で暮らしてきました。そしてその後、21年7か月弱を獄中で過ごしてきました。

僭越な言い方かもしれませんが、過ちはありつつも、子供時代から願っていた世の中をよりよく変えたいという願い通りに生きてこられたことを、私自身ありがたいことと思っております。

半世紀以上も前になりますが、世界も日本も高揚の中で、反戦平和を訴える時代がありました。

ベトナム反戦・連帯の闘い、チェ・ゲバラの訴えた「二つ、三つ、さらに多くのベトナムを！それが合言葉だ！」に心動かされ、また大学の学費値上げ反対闘争に私は進んで参加しました。

そして、闘いの攻防の中でのいきづまりを、武装闘争によって活路を求めようとした共産主義者同盟赤軍派に私も加わりました。赤軍派は、闘い、失敗を重ね、弾圧の中で、うまく闘うことが出来ませんでした。「武装闘争路線」が間違っていたからです。でも当時はそう考えませんでした。武装闘争は組織の結集軸であったので、その路線を疑うよりも、更に闘うことによって解決しようと「決意」で乗り越えようとしました。私も、そのうちの一人です。そしてもっとよく闘うために、世界の抑圧された人々と連帯し、世界も日本も、より良く変えたいと、更に武装闘争路線を堅持して、

パレスチナ解放闘争にボランティアとして参加しました。

以来、パレスチナ解放闘争の人々、また、パレスチナ戦場に連帯する各国の革命を求める人々と出会い、学びながら、いろいろなことに、気付かされながら生きて来ました。武装闘争ばかりか、パレスチナの人々の平和的、非軍事的生存の闘い、命を大切にし、人々が助け合っている姿に解放闘争の源泉があることも学びました。自分が日本で活動していた時、人々の社会生活を知り、人々と共に結び合うような闘いをしてこられなかった過ちを、武装闘争の現場で逆に学んでいきました。私自身の経験や教訓は、語れる範囲で記してきましたが、ここでは長くなりますので略述します。取材を求められておりますことにつきましては、今後、語れる範囲で真摯に答える機会を持つことも考えたいと思っています。

私が獄中に20年以上過ごしている間に、世界も大きく変わりました。ことに、2001年に米国で起きた「9・11事件」は、今日を決定づけていると思います。当時のブッシュ政権は、「9・11事件」に対して犯罪として司法で裁く解決の道を選ばず、「反テロ」戦争の名で、戦争と暴力のパラダイムを選択しました。私の暮らしたイラクをはじめ中東は米軍による民間人の殺害、拷問、難民の発生と、今もその被害は何十万人、何百万人に及びながら、米軍による戦争犯罪は裁かれず、被害を受けた人々は痛みと困窮から抜け出せずにいます。

21世紀を戦乱と難民の世紀へと転じてしまいました。このパラダイムの一つの帰結として、ウクライナに対するロシア軍の侵略と、NATOの武器供与が局地戦を激化させているように思います。ウクライナの人々を犠牲にしたままに。

また、この20余年の間、人間も自然も市場に投げ入れたグローバル資本主義の中で環境破壊や格差の極端な広がりが生まれています。コロナパンデミックはそれらと無縁とも思えません。

ITやAI、加えてコロナ社会の「新しい生活様式」も、私は、まだ経験しておりません。

その上、出所を前にして、内視鏡検査で再び厄介なポリープが発見され、出所後の専門医による治療が再び必要になってしまいました。

社会に戻り、市民の一人として、過去の教訓を胸に微力ながら何か貢献したいという思いはありますが、能力的にも肉体的にも私に出来ることはありません。

まずもって、治療とリハビリに専念する中で、世界・日本の現実を学び「新しい生活様式」を身につけたいと思っています。そして、求められれば、時代の証言者の一人として、反省や総括などを伝えることを自らの役割として応えていくつもりです。

以上、取材要請を頂きました方々に対して、出所にあたっての私自身の心境をお伝えし、御挨拶と致します。　　2022年5月28日 朝

質問について

様々なメディアの方々から、直接、あるいは大谷弁護士を通して、いくつもの質問を頂いております。共通する質問のいくつかについて、大谷弁護士に答えを託します。

①逮捕から21年以上の獄生活から自由の身になって、現在の心境について。

すでに、先のプレスリリースに記しました通りです。更に言えば、海外での様々な活動の中で、喜びも苦労も味わって来ましたので、日本の獄生活が苦しいということは、ありませんでした。いつも命を今日、失うかもしれないという中で生活して来た私にとって、命をつないで今日、出所出来たことは、ありがたいことだと思っています。

逮捕以来、拘束、自由を奪われる中で、心の自由を求めて、獄で初めて短歌を詠むようになり、私に豊かな潤いをそれはもたらしてくれました。また長い間の獄、公判に、30年以上も断絶してい

た学生時代の友人たちをはじめ、変わらぬ友情で、精神的、物質的支援の中で獄中とは言え、快適に精神を保っていくことが出来ました。又、公判の最終段階の2008年に癌が発見され、手術を繰り返し、生きてこの出所の日を迎えることが出来たのは、医療刑務所の主治医をはじめとする方々の尽力のお陰です。感謝しております。

②刑務所、獄生活について何か考えたことはありますか？

それは大いにあります。日本の司法、刑務所行政は、先進国ばかりか、発展途上の国々よりも、たちおくれている点が多々あります。国連人権理事会などから、改善を求められている死刑制度は、最たるものですが、先進国では、もう、日本と米国位しか死刑を行う国は残っていません。又、「無期刑」が、終身刑化している現実も益々既成事実化されているのを実感します。

更に私自身、実感したのは、刑務所の処遇、制度の抜本的改革の必要性です。それなしに、日本は、国際的な人権水準には、とうてい並びえないと思いました。具体的に言えば、その第一は、刑務作業に対する「報奨金」のあまりの低さです。刑務労働に対する国際的な水準とは桁違いです。私も治療の治まった2020年夏から民芸品作りの刑務作業に就きましたが、時給、7円50銭が最初の時給です。一年後の時給は、20円90銭で、一年間にやっと約一万二千円貯まりました。一般的に、受刑者の方々が「刑務所帰り」という厳しい目のある社会の中で、自立して生きていくための資金を持つことが出来ないのです。他の世界の国々の水準に見合う時給であってほしいと思います。再犯率は、それによって大きく下がると思います。

第二は「国民皆保険（国民健康保険）」の日本で、受刑者には、それが適用されていない点です。厚生労働省ではなく、法務省の管轄に受刑者たちの医療がおかれているためです。刑務所の医療は酷いもので、当センターに移監されてきても、手遅れのケースが少なくありません。それに、歯科治療は、当センターを含めて、刑務所医療から義歯作りは除外されているために、何十万円という自己負担で治療するしかありません。困窮下にある受刑者に、まったく医療が届いていません。幸運にも、私は、刑務所でも良い条件に恵まれ医療も適切に受けることが出来ましたが、全受刑者への国民健康保険の適用を願っています。

更に第三には、受刑者の処遇に関する規則があまりに詳細に一挙手一投足を縛り人間らしい生活を著しく損なっていることです。明治時代の監獄法は、その精神法・矯正教育として生き続けています。現在の、人権を重視する国際社会にふさわしく、受刑処遇や拘留中の規則の抜本的改善が必要だと実感しました。

③裁かれた事件について、どう考えていますか？

私は、他人の旅券を不正に取得・使用したことについては、自分の活動のためにと他人を踏みつけにしてしまったこと、人間としても恥ずべき行為であり、被害者に謝罪してきました。許して下さった方も、そうでない方もおりました。このことは、これからの再出発に、いつも心に刻んでいたいと思っています。私はまた「ハーグ事件」について公訴されて、ずっと無罪を主張して来ました。最高裁まで争いましたが、棄却され、刑に服しました。不服はもちろんあり、再審も弁護士と相談しましたが、丁度、癌の手術なども続きました。すでに解散した日本赤軍のかつての活動に対する報復的な重刑求刑攻撃・判決は、私ばかりか、指導的に闘った者たちにも下されました。そうした環境の中で、指導的な立場にあった自らの政治責任として、判決を引き受けて前向きに生きる方

が人生を豊かに出来ると考えて再審を断念しました。そして獄生活を価値あるものにしようと学習し、過去を捉え返して執筆し、歌を詠み、発言し、交流し、また寄稿や出版をしながら、受刑者仲間との語らいを楽しみながら生きてきました。これも又、海外での活動と違った尊い日々となりました。きちんと罪を償った以上、公安警察や関連の者たちに、私のこれからの新しい生活の邪魔をしてほしくありません。尾行したり、マスコミを煽るような「危険視」は、許されて良い筈がありません。

④「テロリスト」呼称が一部にあるが、どう考えているか？

私は、自分が「テロリスト」と考えたことはありません。「テロリスト」呼称が喧伝されたのは、米国レーガン大統領令138号に大きく転換が行われた時代からです。七十年代から八十年代初期には、政治活動に武装した闘いを含む勢力が世界各地に居ました。当時は「武装勢力」「解放勢力」「革命組織」などと呼ぶのが、武装した政治勢力に対する呼び名でした。「テロリスト」呼称は、政治的意図や背景を隠し、「犯罪者」化する目的で、レーガン政権や、イスラエル政府が進めてきた時代の産物でした。もちろん「恐怖を煽る」という意味での「テロ」や「テロリスト」という言葉は、それまでも使われていましたが、大統領令で「テロリスト」と呼ばせる報道のガイドラインまで作って解放勢力、とくにパレスチナ勢力に対決しました。それが奏功してしまいました。イスラエルの領土併合・国境変更に抵抗する闘いが「テロ・テロリスト」で、ロシアの侵略・占領に対する闘いが「英雄的」などという米政府のダブルスタンダードが横行している世界をもっと知って欲しいです。ウクライナの人民のロシア侵略に対する闘いが、「英雄的」ならば、パレスチナのイスラエル侵略併合に対する闘いもまた「テロ」ではなく英雄的闘いであると知ってほしい。そして、「テロリスト」と呼ばれる人を知る時、呼んでいる人々の意図を知ってほしいと思います。

⑤海外に居る指名手配中の仲間に対して、どう考えているか？

公判の中でも主張してきましたが、リッダ闘争を闘った岡本公三さんは、1988年、パレスチナ解放組織が捕虜としたイスラエル兵との「捕虜交換」によって、ジュネーブ条約に基づき、赤十字国際委員会の仲介によって、イスラエルの獄から解放されました。彼は、イスラエルの軍事法廷による終身刑を受けて13年服役し、ジュネーブ条約の正規の手続きによってそれらは終了し、社会に戻りました。国際法の一事不再理の原則、ジュネーブ条約、更には、イスラエルの獄で受けた精神的ダメージを抱えています。こうした諸事情を見れば、日本政府の指名手配は、とり下げられるべきだと思います。

岡本さんは、レバノン政府に政治亡命を認められ、パレスチナや、レバノンの友人たちの支えの中で療養しつつ穏やかにすごしています。手配を、日本政府がとり下げることによって、岡本さんの帰国の願いがあれば、いつでも日本に帰れるようになることを私は願っています。他の人々については、すでに半世紀近い、又は超えた、かつての事件で指名手配されています。私同様老齢ながら、彼らは、人々や社会に貢献する志で生き続けていることでしょう。今も生き、その必要とされる場で生き抜いてほしいと願っています。公安当局は、「かつての闘いを反省するなら、彼らは自首するべきだ。私が自首を勧めるべきだ」と言ったことがあります。長くはない残る日々を生き続け貢献する方が、どんなに有為なことでしょう。パレスチナから学んだのは、どんな逆境にあっても生き延びる思想であり、反省もそこで活かすことが、時効をこえて生きる人権の基本と考えています。

他に「リッダ闘争について」、「ウクライナについて」などの質問も頂きましたが、この紙面ではお答え出来ません。興味のおありになる方は、丁度出版されました自著「戦士たちの記録―パレスチナに生きる」（幻冬舎刊）に、それらの点を認めましたので、御一読頂ければうれしいです。

まだ多くの質問を頂きましたが、以上とします。

乱筆、乱文で失礼致します。

2022年5月28日　重信 房子

戦士たちのリッダ闘争（5）

重信 房子

8　出発

5月10日頃、ナクバの日の前だったと思う。朝霧の山系を越えて戦士たち四人はベイルートに戻って来た。今度は出撃の準備のためである。すでに私たちは、赤軍派とも去年決別してきたので、ＰＦＬＰの義勇兵の一人一人であり、名乗るべき組織もなかった。アハマドは「世界赤軍」と名乗りたいと言っていたらしいが、組織も実体もない。バーシムは無名戦士として闘うことを去年から決めていた。オリードの死を経てＰＦＬＰ義勇兵として闘うことをサラーハとも私とも語り合意していた。バーシムは赤軍派としてアラブに来た以上、赤軍派として名乗らなくても問題ないかと気にしていたが、もう名乗るべきその赤軍派もなかった。バーシムは赤軍派時代の仲間の名を伝えて、ニザールに共に闘ってほしいと託したことを、のちにニザールから聞いた。サラーハは自分の逮捕歴から公安警察に指紋が残っているのだと言って「無名戦士にならへん、きっちりとそれは処理せんとな」と平然と言っていた。弾を撃ち尽くした後に手榴弾で自決する時、指がふっ飛んでしまうように工夫するということなのだ。そう言いつつ冷静に穏やかに準備を進める彼らの思いに、私は気持だけしか寄り添えない。私も連赤事件の衝撃以降、国内へ意見を提起したり、日本人会、在ベイルートの他のボランティア仲間や在欧州の日本人たちと、パレスチナ連帯共同の協力体制作りと忙しい。作戦のことは言えないが、それ以降のパレスチナ連帯の広がりを想定しながら、欧州の日本人や他の左翼の人々との広がりを作ろうとしていた。

四人が出撃のためにバールベックから山を越えてベイルートに下りてきた同じ頃、大きなゲリラ攻撃が始まった。5月8日、ブリュッセル発イスラエル行きのベルギーのサベナ航空機をパレスチナ戦士四人がハイジャックした。そしてイスラエルのリッダ（テルアビブ）空港に着陸させ、服役中のパレスチナ人３１７人の政治犯の釈放を求めた。これに対して、イスラエルは「要求を受け入れる」と表明し、騙し討ちに出た。空港で政治犯の移送を演出し、国際赤十字の車に食料と医療品を積んだ搬入を装って特殊部隊「サエレト」が突入した。パレスチナ部隊の男たち二人を殺害し、女性二人を拘束した。作戦の最初が鮮やかでスムーズにテルアビブ空港まで行ったのに、騙し討ちに遭って敗れたことでベイルートの人々を悔しがらせた。その上、まだバーシムたちがベイルートで出発準備をしている頃だったと思うが、拘束された女性の一人がイスラエルのテレビに登場して、男たちに騙されて作戦に加わったなどと「自供」を強いられた。パレスチナ難民キャンプの人々はせっかくの被占領地を戦場にした闘いを誇っていたのにと、イスラエルへの怒りと同時に女性が自白剤でやられたのか、覚悟の弱さか自供し仲間をおとしめたと憤慨していた。この作戦は、アウトサイドワークにかつて居たアリタハがファタハの「黒い九月」と組んで行った作戦であった。アリタハはイスラエルの突入によって殺害されたが、アブハニとは作戦について通じ合っていたという。アリハタの妹は私の友人の一人だったが、以来彼女は喪を通しいつも黒い服しか着なかった。

出発前のこのイスラエルの騙し討ち事件をきっかけに、戦士たちはやっぱり自決しかないと話をしていた。のちにニザール丸岡も言っていたし、ユセフも前に言っていたが、達観した境地のサラーハは仏様のように穏やかで、そのくせ笑わせる人々への気遣いは忘れなかった。バーシムもまた大軍を率いる指揮官のように慈しみ深く広い心で何事でも受けとめていたという。この事件をバーシムは「投降が無意味だとアブハニは悟ってくれればいいが……。アリタハたちの闘いの無念さは、我々の作戦の成功でキャンプの人々をより喜ばせるだろう」と話していた。この話の時だったか、バーシムが珍しく茶目っ気を出して「投降はしない。三島由紀夫は死に場所を求めて決起したが、

我々は生きるパレスチナの力になる。白鉢巻でもするか……」と笑いながら「三島の件があるから白鉢巻したら日本では右翼と間違われるだろう。パレスチナの思想は人民革命って日本には伝わっていないし」と言った。「そう言えば、私たちにパレスチナのDさんを紹介してくれた中東専門家のAさんは最後の陸軍中野学校の生徒でアラビア語を学んだって言ってたわね。大東亜共栄圏の射程にはアラブも入っていたのね」と私が言うと、「大川周明は最初のイスラーム宗教の日本への紹介者だったよな」とバーシムが言った。「アラブは日本の民族主義者の夢につながっていたんだな。日本が敗れたら玄界灘を泳いで渡ってアラブに行こうと若いAさんは昔考えたと言っていたし」とAさんの夢をバーシムも語った。私は、父の民族運動がなぜ「右翼」と呼ばれるようになったのかを思い出しつつ言った。父たちは、資本主義によって金の支配する世の中となり、米を作っても農家は米を食べられず、娘を売りに出すような貧しい状態に置かれる一方で、財界・政界の大物たちは利権や富を独占していて許せん、と起ちあがったと話していたけれど、こっち(もののみ)に来てわかったことがある。「人民の為に」と武士意識でやっては、結局差別構造が見えないのだと思う。パレスチナを見て、人民の「為」というより人民と「共に」がないと知識人は、とくにエリート意識化してしまうのだとわかった気がする、と、そんな話をサラーハ、バーシムと語り合った。

しばらくして、サベナ航空機事件の取材でテルアビブ空港入りをしたジャーナリストの中にいた友人の情報から、空港の到着ロビーや警備状況をPFLPアブハニ部局も知ることができたという。その調査からも京都の仲間たちの調査などがほぼ完璧だったことがわかったという。

5月中旬、もう20日過ぎだったかもしれない。明日ベイルートを出発するという最後の日の夕方、バーシムたちは「オリードに挨拶に行く」と決めていた。「ピジョンロック」の傍らの海に突き出た岩場の岬へ。今日は日本人との遭遇も気にせず、海岸通りをゆっくりと歩きながら、サンセット前

の岬を目指した。オリード山田の水死以来ずっと「闘いあらば、オリードと共に」と決めていたし、オリードはいつも身近に居た。あの岩場でオリードを弔う最後の機会を彼らは持ちたかった。私は深紅のケシに似たアネモネのアドニスの花、一面に咲く白菊、黄菊を摘んで花束を作った。オリードの好きだったラーメンもオレンジも準備した。岬の岩場からピジョンロックを臨むと、ちょうど半分以上海に沈みかけた太陽が、黄金色やすみれ色の光線を放射しながらこちらを照らしている。「オリード！もうすぐ会いに行くぞ！」サラーハが大声で海に向かって叫んだ。バーシムは無言でラーメンやオレンジを力一杯投擲し、私も花束を海に放った。涙を流しながら立ちつくしているサラーハの顔を残照が笑い顔のように照らしていたのを忘れることができない。最後の儀式のような気分で黙祷を終えると、「さあこれで思い残すことはない」「これから宴会を派手にやろうぜ」と群青色に染まり始めた空を見上げ、水平線の向こうに落ちた太陽の光を凝視していた仲間たち。

最後の晩餐は寿司、のり巻きや刺身、するめなどの日本料理やアラブ料理のシシカバブやレバノンサラダのタッブーレなどに地酒のアラク。焼酎や日本酒もある。私の好きなレバノンのロゼワインも。絨毯を敷いた床の上に料理を全部並べて車座になった。「今日しか、みんなと喋くることできんから盛大にやろう」とバーシムが言い「よしゃ！」とサラーハ。私もアハマドもニザールも「異議なし」と、みんなでまず乾杯した。確か日本の

焼酎はアハマドが持って来たのか、酒はニザールか。もう忘れてしまったが何本かあった。私がアハマドに兄の武さんと会えずに出発することになった点を詫び、それでいいのか？と尋ねると、ニコニコして「もう僕は決めとるんです。兄貴のことはいつになるかわからんし、そっちに任せます。やっぱり僕は闘わずに兄に会うわけにはいかんでしょう」と強気の発言。「でも一つ僕の心残りは継母のことなんです。実の母が病死したあと、僕たち男兄弟を本当の息子以上の愛情で育ててくれたんですよ。僕は一番可愛がってもらったかな。そんなにすごい母親のことを闘いのあとで誰かに親の育て方が悪いって責任追求されることがもしあると、心外で辛いです。母親には申し訳ないと思う。でもそれは僕にはどうすることもできないんで。ただ母親のためにグレたなんて言われたり、母をそんなふうに悲しませたくない」というような話をしんみりと話してくれた。アハマドの優しい親思いにみんな共通の想いがありうなずいていた。アハマドはバーシムに対する信頼でパレスチナの闘いに決起しようと決めたのがいろいろの雑談の中でよくわかった。

この晩餐で、私は初めてニザール丸岡に会った。静かな若者だった。もっとものちにニザールに言わせれば、年上のみんなが我先にとしゃべり合っていたので話す機会がなかったらしい。のちにニザールもおしゃべりが好きなのは良くわかったが。

ＰＦＬＰの指揮官やコーチの家族たちの話に大笑いしたり、羊飼の少年やパレスチナの裸足の子供たちのこと。また大学時代の失敗や武勇伝の数々はアハマドも雄弁に語る。何人も大学に「子分」のような仲間たちがいるらしい。

ニザールの予備校生という経歴を聞いたついでに、私が赤軍派の高校生の一部が自供して困った話をしたら、あたかも高校生一般を批判したように取られて、ニザールから「赤軍派の大学生の方がずっと信用できない」などと言い返されてしまった。それもうなずける批判であった。初対面でニザールと口をきいたのがそんなやり合いになってバーシムから自分たちの後を托すので仲良くやってくれよ、と言われてしまった。ニザールとはこの日からずっと共に深い絆で活動していくことになる。話の中でバーシムが「我々の闘いは日本の左翼には理解も支持もされないこともあり得るな。『連赤』のあとだし。でもかまわんけど」と言った。「そんなことはない。わかる人にはわかるでしょ」と私が言った。アハマドは「『連赤』と我々が一緒にされるのは許せんよ。我々は世界赤軍なんだから」と強く主張していた。そして「連赤」のような革命家の死に方であってはならない。革命家は人民の要求に支えられて、いかに生き死ぬのかを、我々の闘いで示すことだと誓い盃を合わせた。「歌を歌いたいなあ。今日は最後だし、このアパートならかまわんだろう」とバーシムとサラーハで言い合い、食べながら語るのが一段落するとワインも追加して飲みながら「ワルシャワ労働歌」や「琵琶湖周航の歌」「北帰行」や「討匪行」「心騒ぐ青春の歌」「パルチザンの歌」など、一人が歌いだすとみなで合唱し、終わると誰かが歌いはじめる、そんなふうに続いた。「もう何も思い残すことはない。あのきれいな瞳の裸足の子供たちにさようならを言えなかったことが心残りぐらいだな……」「パレスチナの人々、子供たちが必ず我々の後に続くのがわかる。どうして日本でこんなふうに闘えなかったのかな……」とサラーハ。また歌が続き雑談が続く。

宴の途中で、バーシムが「肩の凝る話はいらないと思うけど一言だけ」と断って正座した。そして「これまでありがとう。闘いは必ず成功させる。そして僕らの闘いがパレスチナにとって新しい希望への大きな一撃になる。それがよくわかるから闘いに確信がある。パレスチナばかりかアラブ諸国もイスラエルも大騒ぎになる。それほどの闘いだ。こんな大切な任務を任せてくれたＰＦＬＰには感謝している。我々は頭で立つんではなく、足で立つんだ。マリアン、ニザールたちに、日本の革命もパレスチナのことも任せた。あとは頼む。我々は必ず最高の闘いをしてみせる」そんなことをバーシムは一語一語頬を紅潮させながら語った。「もうこれくらいでいいやろう」と照れながら締

めくくった。残される私は聞きながら胸に迫る思いがこみあげてきたが、何か言わねば……とあわてて言った。「バーシム、サラーハ、アハマド。あなたたちこそ先頭で闘ってくれてありがとう。成功を確信している。必ず戻って来て！」と心から言った。もう戻らない覚悟の闘いであることは誰も知っている。「必ず成功させたら戻るよ。『菊花の契り』じゃないけど。必ず戻ってくるから。それまで頼みます」みんなを笑わせてばかりいるサラーハがニヤリと言い返した。「ありがとう！」互いに礼を言い合った。「闘うぞ！我々は絶対に失敗しない。必ず成功させる。我々が死んでも葬式はいらない。祝ってほしい」「そうだ、闘いの日を祭にしてくれ」「我々の旅立ちには祭こそふさわしい」お互いに口々に言い合った。バーシムは「僕は今日はどんなに飲んでも良い酒だよ。新年会の時とは違う」と、サラーハとニコニコしていたが、私の方が悪酔いしてしまった。

最後に肩を寄せ、スクラムを組んでインターナショナルを二番まで声を抑えながら歌った。

起て飢えたる者(はらがら)よ　今(ぁかつき)ぞ日は近し
醒めよわが同胞　暁は来ぬ
暴虐の鎖断つ日　旗は血に燃(も)えて
海を隔てつ我等　腕 結びゆく
いざ闘わん　いざ　奮い立て　いざ
インターナショナル　我等がもの
いざ闘わん　いざ　奮い立て　いざ
インターナショナル　我等がもの

聴け我等が雄叫び　天地轟きて
屍越ゆる我が旗　行く手を守る
圧制の壁破りて　固き我が腕
今ぞ高く掲げん　我が勝利の旗
いざ闘わん　いざ　奮い立て　いざ
インターナショナル　我等がもの
いざ闘わん　いざ　奮い立て　いざ
インターナショナル　我等がもの

（海外では外国の革命家たちとこのインターナショナルを歌う時、日本のように「インターナショナル」の前に「ああ」を入れると音が揃わない。「ああ」は願望のようでいらないと私たちは「ああ」を省いて歌っていた）

この歌はパレスチナにふさわしいと思った。それから誰言うともなく、お互いの手を上へ上へ次から次へと重ね合って、「勝つぞ！勝つぞ！」と強く振り誓い合った。「地獄でまた革命やろう！勝つぞ！」と。こんなふうに最後の夜を過ごした。

別れた後、夜遅くバーシムが全体の意志一致を終えて私のアパートに立ち寄った。また会う時まで持っていてほしいと、訓練ノートにボロボロの文庫本のランボー詩集、独語辞典と唐詩選。それにサラーハの切手帳やお守りのキーホルダーなどを私に預けた。ランボーの詩集を持っていたのを知らなかったので「あれ、ランボー？バーシムも詩を書いてた？」「詩というほどじゃないけど」「私はランボーのやぶれかぶれの吠える心はあまり好きでない。ランボーは詩を断ってから、アデンやエチオピアの方で商人だったみたいね」と言うと、「彼の言葉には胸を鷲掴まれる思いにさせる力がある……。僕たち、最後に何で詩の話なんかしてるんだ？……」と笑った。「地獄でまた革命やる気だからじゃない？」と私も笑った。

空想家で救い難い理想主義者だと言われるなら何千回でもそのとおりだと言ったゲバラじゃないけど、不可能かもしれない世界革命の夢を僕らが描き続けるのは、世界がどんどん非人間的になる中で本当の光を灯したいからだ。自分たちの生と死が新しい理想の時代を導く一助になるなら何も惜しまない。諦めないパレスチナの闘いで学んだことだ。理想主義者でいい。理想を生き延びさせよう。理想は持ち続ける限り、もっと良い人間の世界を開くから。そんなふうに最後に語り誓い合った。

「もう行く。ありがとう今日まで」バーシムが立ちあがると、「オリードの生まれかわり」と彼らが可愛がっていて、私がその後引き取ったオリードと呼ばれた猫がバーシムの後を追いかけて行った。見上げる暁闇に暁の星ビーナスが煌いていた。バーシムは振り向かずに角を曲がって去った。

ずいぶん後になって、彼が日本にいた時に書いていたノートの後ろにこんな詩を書き遺していたのを知った。その詩を読むたびに、最後の夜、地面をしっかり踏みしめながら振り向かずに角を曲がったバーシムの姿が浮かんでくる。

奥平剛士
これが俺の名だ
まだ何もしていない
何もせずに生きるために
多くの代価を支払った
思想的な健全さのために
別な健全さを浪費しつつあるのだ
時間との競争にきわどい差をつけつつ
生にしがみついている
天よ、我に仕事を与えよ

もう、これが最後の日と頭ではわかっているのに、人間の生き死にに、どうしてあんなに平気で、また冷静でいられたのだろうと、老齢となった半世紀を経て思い返すことがある。

でもそれは「平気」でも「冷静」でもなくて、使命への渇望が感情、心情を無自覚に抑えつけていたのだろうと今はわかる。パレスチナの闘いの日常の中に居ると、あの当時は誰もが使命を果たすことを誇りとしていた。チェ・ゲバラと、それに連なる世界が間近にあり、その一翼に私たちも居た。どの出会ったパレスチナ人も、また世界各地から連帯してボランティア参加している同世代の友らも、その激情を秘めていた時代であった。信じられないかもしれないが、ロックスターになるより革命家になることが若者たちの夢だったと、西ドイツの革命家も語ったことがある。バーシムたちも激情を使命貫徹へと一筋に考え、オリードの死の責任を引き受けようとする義理もまた強く持っていたのだと思う。それに連合赤軍事件の「仲間の死」のあり方、革命家の死生観も意識していたと思う。言い換えれば、当時の私たちは、パレスチナの闘いに全身で尽くし、革命家たらんと理想を求めつつ、日本のこと、「連赤」以降変化するであろう日本の革命の冬に、まったく目を向けきれていなかった。

彼らは、翌朝、レバノンを発った。欧州に出て、列車でイタリアへと向かった。のどかな麦秋の広々と続く欧州の田園風景の平和さと比較して、レバノンのパレスチナ難民キャンプが心に焼きついていると、戦闘の後に届いたバーシムの手紙に記されていたので、そのルートを辿ったことがわかった。ニザールはサラーハを見送ったという。

ローマでＰＦＬＰの仲間がバーシムたちの望んだ銃、チェコ製の自動小銃ＶＺ５８と手榴弾を戦士たちに渡した。ローマでは、それぞれが大聖堂、コロセウムなどの遺跡を巡りながら最後の時を待った。大聖堂の窓から入る光の中で、バーシムが家族と私に宛てた手紙を書いたのは出撃の前日であった。

三戦士はすべての準備を終えた。仲の良い学生仲間のように別れを惜しんで最後の夕食を乾杯しながら取った。

こうして翌日、三人の戦士たちはローマ空港から約３時間の距離、レバノンにほど近いイスラエルのテルアビブ空港（アブハニ部局はリッダ空港とも呼んでいた）に飛んだ。

私の手許に残されたバーシムのボロボロになったランボーの「地獄の季節」をめくると、いくつもの書込みや線が引かれていた。「俺は自分の理性の囚徒ではない」という一行に黒々とした太い線が引かれているのを見つけた。

＊＊＊

部分掲載した「戦士たちのリッダ闘争」は書名『戦士たちの記録――パレスチナに生きる』（定価2000円）として５月下旬に幻冬舎から出版です。（この部分掲載のデーターに著者校正が入ったので完成稿とは若干の異動があります）

１５７号の誤植の訂正とお詫び

５頁左列上から４行目　報告のよると→報告によると
５頁左列下から６行目　ＱＵＡ→ＱＵＡＤ
８頁左列上から１９行目　そしそれが→そしてそれが
１９頁書評左列上から２行目　管野→菅野
１９頁書評右列上から３行目　三里共闘→三里塚共闘
最終頁左列上から１行目　農民一人→農民の一人